



明治書院、税込み1260円

脳の言語地図

単語、発音、文法— 外国語を学ぶとき、誰しものどれかにつまづくだろう。勉強すればするほど、普段母語では意識しない言語の法則が浮かび上がってくる。本書『脳の言語地図』(酒井邦嘉准教授 総合文化研究科)は、脳科学入門書として、人間の言語学習の特徴をわかりやすく解説する。

本書は、大人のための教材が投げかける疑問に先生が答える形式だ。教科書というコンセプトの「学びやぶく」シリーズの一冊。高校生から楽しめるようにと平易な会話調で、本文前半で人間の脳や脳科学の歴史について解説さ

る。個人差に応じたテラーメイド教育が生まれるのでは—と酒井准教授は推測する。「外国語が上達しないのをネガティブにとらえる必要はない」と酒井准教授。脳は幼いころに学ぶ母語にチューンアップされる。幼少期には言葉への適応能力が高い。時間がたつて新しい言語を受け付けにくくなっているのは当然だと指摘

る。学部時代は物理学を専攻し、現在も駒場で物理を教える酒井准教授。物理学を、生物学を統一的に見るための手段ととらえ、言語と脳の「自然さ」を支配する法則解明に挑んでいる。言語学の枠組みを認識した上で脳を観察、全ての言語に共通する「普通文法」を見つけ出そうとする。「脳をタンパク質の集合体ととらえてはいけません。多様な言語の現象を少ない法則で説明できる、脳のモデルが必要ですよ」。脳の言語処理の基本的な構造を明らかにしていきたいと考えだ。

言語に潜む「自然さ」を探る

書かれていいる。「動物の鳴き声は言語といえるのか」「バイリンガルの脳の働きはどんなものか」など、生徒が投げかける疑問に先生

いから始まり、MRIによる脳活動の測定の間場を紹介する。中盤では人間の言語について、普遍的な言語の構造は存在するのかなどを考察する。後半では、脳と言語の関係が描かれ、英語学習にも触れている。脳における言語中枢の機能の説明を通じて、熟練した学習者では脳の働きが「省エネ化」され、より効率的に言語を駆使できることを指摘する。「将来的には、脳

する。「この点を認識した上で外国語の学習を進めるべきですね」と酒井准教授は言う。

「自然言語」に限られる。これは「見えない文法」の



酒井 邦嘉 准教授 (総合文化研究科)

92年理学系研究科博士課程修了。マサチューセッツ工科大学客員研究員などを経て、07年より現職。

「動物の鳴き声は言語といえるのか」「バイリンガルの脳の働きはどんなものか」など、生徒が投げかける疑問に先生

「この点を認識した上で外国語の学習を進めるべきですね」と酒井准教授は言う。

「自然言語」に限られる。これは「見えない文法」の

(山口達也)